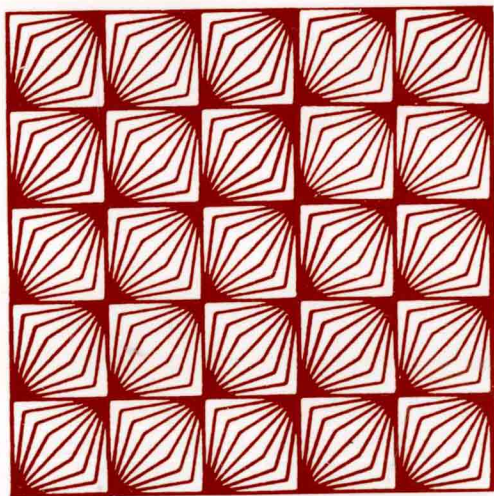


惜しみなく愛は奪う 宣言一つ

有島武郎著

進藤純孝 解説



白鳳社

昭和四五年七月二〇日第一刷発行
昭和四七年六月一五日第二刷発行

定価・五五〇円

著作者 有島武郎

発行者 高橋謙

発行所 株式会社 白鳳社

東京都千代田区神田神保町一―二〇
電話・東京(03)二九一―七五七一
振替・東京九二四一

印刷・大文堂印刷株式会社
製本・和田製本工業株式会社

惜しみなく愛は奪う／宣言一つ

有島武郎 著

惜しみなく愛は奪う／宣言一つ

進藤純孝 解説

其

白鳳社
名著選

惜しみなく愛は奪う／宣言一つ

目次

惜しみなく愛は奪う	九
宣言一つ	一四三
注 釈	一五二
宣言の文学——有島武郎の人と作品——進藤純孝	一六三
有島武郎年譜	一九二
関係図書目録	二〇九

《凡例》

一、本書は、叢文閣版『有島武郎全集』（大正十三年刊）に所収の同著作を底本とした。

一、本文の表記はいわゆる現代表記に改めたが、その主眼点は次のとおりである。

(1) 漢字は、当用漢字字体表に掲げられているものは新字体を用いた。

(2) 当用漢字の範囲での同音の漢字による書きかえは、これを行なわない。ただし、同一漢字で正字と俗字が混用されているものは、現代の主流字に統一した。

(3) かな書きを慣用とするものは、語意をそこなわない範囲において、原文の漢字をかなに改めた。なお、かな書きの増加に伴い、文意を明確にするともに読みやすさを考えて、新たに若干の読点を加えた。

(4) 送りがないは、原則として内閣告示「送りがなのつけ方」に拠って、一部改めた。

(5) 外国語（固有名詞を含む）のかたかな表記は、原文の調子を尊重して、底本のままとした。ただし、キはイに、キはヴィに改めた。

(6) ふりがなは、底本にあるもののほか、当用漢字音訓表にその音訓が認められていないもの、および誤読のおそれがあるものに付する方針で、各稿ごとに初出の個所に付した。ただし「惜しみなく愛は奪う」については、第一三章までを前半部、第一四章以下を後半部とし、各稿ごとに初出個所に付した。

一、本文傍に*印を付した語または文は、巻末に注釈をつけたものである。

一、なお、底本の中の明らかな誤りはこれを正した。

惜しみなく愛は奪う

一

太初に道^{はじめ}があつたか行^{おこな}いがあつたか、私はそれを知らない*。しかし誰^{だれ}がそれを知つていよう、私はそれを知りたいと希^{ねが}う。そして誰がそれを知りたいと希わぬだろう。けれども私はそれを考えたとは思わない。知ることと考えることとの間には埋^みめえない大きな溝^{みぞ}がある。人はよくこの溝を無視して、考えることによつて知ることに達しようとはしないだろうか。私はその幻覺にはもう迷うまいと思う。知ることはできない。が、知ろうとは欲する。人は生まれると直ちにこの「不可能」と「欲求」との間にさいなまれる。不可能であるという理由で私は欲求を抛^{なげ}つことができない。それは私としてなんという我儘^{わがまま}であらう。そして自分ながらなんという可憐^{かれん}さであらう。

太初のこととは私の欲求をもつてそれに私を結びつけることによつて満足しよう。私にはとても目あてがないが、知る日の来たらんことを欲求して満足しよう。

私がこの奇異な世界に生まれ出たことについては、そしてこの世界の中にあつて今日まで生命

を続けてきたことについては、私は明らかに知っている。この認識を誇るべきにせよ、恥ずべきにせよ、私はごまかしておくことができない。私は私の生命を考えてばかりはいない。確かに知っている。哲学者が知っているように知っているのではないかもしれない。また深い生活の冒険者が知っているように知っているのではないかもしれない。しかし私は知っている。この私の所有を他のいかなるものもくりますことはできない。また他のいかなる威力も私からそれを奪い取ることはできない。これこそ私の存在が所有するただ一つの所有だ。

恐るべき永劫えいこくが私の周囲にはある。永劫は恐ろしい。あるときには氷のように冷やかな、凝然としてよどみわたったあるものとして私にせまる。またあるときは眼めもくらむばかりかがやかし、瞬時も動揺流転をやめぬあるものとして私にせまる。私はそのものの隅すみか、中央かに落とされた点にすぎない。広さと幅と高さとを点は持たぬと幾何学は私に教える。私は永劫に対して私自身を点に等しいと思う。永劫の前に立つ私は何ものでもないだろう。それでも点が存在するごとく私もまた永劫の中に存在する。私は点となって生まれ出た。そしてまたくうちに跡形もなくなくなるのを恐ろしく思うでしまつて、私はいなくなるのだ。それも私は知っている。そして私はいなくなるのを恐ろしく思うよりも、点となってここに私が私として生まれ出たことを恐ろしく思う。

しかし私は生まれ出た。私はそれを知る。私自身がこの事実を知る主体である以上、この私の

生命はなんといっても私のものだ。私はこの生命を私の思うように生きることができなのだ。私の唯一の所有よ。私はすべての懷疑にかかわらず、結局それを尊重愛撫しないでいられようか。涙にまで私は自身を痛感する。

一人の旅客が永劫の道を行く。彼を彼自身のように知っているものはどこにもいない。陽の照るときには、彼の忠実な伴侶はその影であるだろう。空が曇り果てるときには、そして夜には、伴侶たるべき彼の影もない。そのとき彼は独り彼の衷にのみ忠実な伴侶を見いださねばならぬ。拙くとも、醜くとも、彼にとっては彼以上のものをどこに求めえよう。こう私は自分を一人の旅客にしてみるときもある。

私はかくのごとくにして私自身である。けれども私の周囲にある人や物やは明らかに私ではない。私が一つの言葉を申し出るとき、私以外の誰が、そして何が、私がその言葉をあらしめるようにあらしめうるか。私は周囲の人と物とにどう繋がれたら正しい関係におかれるのであろう。いかなる関係も可能ではありえないのか。可能ならばそれを私はどうして見いだせばいいのか。誰がそれを私に教えてくれるのだろうか。……結局それは私自身ではないか。

思えばそれは寂しい道である。最も無力なる私は私自身にたよるほかの何ものをも持っていない。自己に矛盾し、自己に蹉跌し、自己に困迷する、それに何の不思議があろうぞ。私は時々私自身に対して神のように寛大になる。それは時々私の姿が、母を失った嬰兒のごとく私の眼に映

るからだ。嬰兒はどこをあてともなく匍匐する。その姿は既に十分憐れまれるに足る。嬰兒はしばしば過つて火に陥る、もしくは水に溺れる。そしてわずかにそこから這い出ると、べそをかきながらまた匍匐を続けてゆく。このいたいたけな姿を憐れむのを自己に阿るものとのみい退けられるものであろうか。たとい道徳がそれを自己耽溺と罵らば罵れ、私は自己に對するこの哀憐の情を失うに忍びない。孤独な者は自分の掌を見つめることにすら、熱い涙をさそわれるのではないか。

思えばそれは峻しい道でもある。私の主体とは私自身だと知るのは、私を極度に嚴肅にする。他人に對しては与ええないきびしい鞭打ちを与えざるをえないものは畢竟自身に對してだ。誘惑にかかったように私はそこに導かれる。筈にはげまされて振るい立つ私を見るのも、打撲に抵抗しきれなくなつて倒れ伏す私を見るのも、ともに私が生きてゆくうえに、なくてはならぬものであるのを知る。そのときに私は勇ましい。私の前には力いっぱい生活する私のほかには何もものを見ない。私は乗り越え乗り越え、自分の力に押され押されて未見の境界へと險難を侵して進む。そしていかなる生命の威脅にもおびえまいとする。そのとき傷の痛みは私に、ある甘さを味わわせる。しかしこの自己緊張の極点には往々にして恐ろしい自己疑惑が私を待ち設けている。ついに私は疲れ果てようとする。私の力がもうこのうえには私を動かさえないと思われるような瞬間が来る。私のただ一つの城郭なる私自身がみるみる廃墟の姿を現わすのを見なければならな

いのは、私の眼前を暗黒にする。

けれどもそれらの不安や失望が常に私を脅かすにもかかわらず、太初はじめの何であるかを知らない私には、自身を措はかいてたよるべき何ものもない。すべての矛盾と渾沌こんとんとの中にあって私は私自身であろう。私を実価以上に値ちぶみすることをしまい。私を実価以下に虐待くわいすることもしまい。私は私の正しい価の中にあることを勉つとめよう。私の価値がいかに低いものであらうとも、私の正しい価値の中にあるとすること自身は何ものかであらねばならぬ。よしそれが何ものでもないにしろ、そのほかに私の採るべき態度はないではないか。一個の金剛石を持つものは、その宝玉の正しい価値においてそれを持つと願うのだらう。私の私自身は宝玉のように尊とうといものではないかもしれない。しかし心持においては宝玉を持つ人の心持と少しも変わるところがない。

私は私のもの、私のただ一つのもの。私は私自身を何ものにも代えがたく愛することから始めねばならない。

もし私のこの貧しい感想を読む人があったとき、この出发点を首肯することができないならば、私はその人にさらにいい進むべき何ものをも持ちえない。太初はじめが道ことばであるか行おこないであるかを（考えるのではなく）知りきっている人にとっては、この感想は無視さるべき無益なものであらう。私は自分がきわめて低い生活途上に立っているものであることをよく知りぬいている。ただ、今の私はそこに一番堅固な立場を持っているがゆえに、そこに立つことを恥じまいとするものだ。

前にもいったように、私はより高い大きなものに対する欲求をもって、知りえたる現在に安住しうるのを自己に感謝する。

二

私の言おうとすることが読者に十分の理解を与ええなくはないかと恐れる。人が人自身を言い現わすのは一番容易なことであらねばならぬ。なんとになればそれはその人自身が最もよく知り抜いているはずの事柄だから。

実際はしかしそうではない。私たちの用いている言葉はいわば狼奔ろうせいのようなものだ。それは獲物を取るには役立つけれども、私たち自身に向かっては妨げにこそなれ、役には立たない。あるいは廓大鏡かくだいきようのようなものだ。私たちはそれによって身外しんがいを見うるけれども、私たち自身の顔を見ることはできない。あるいはまた精巧な機械といってもよい。私たちはそれによってあらゆるものを造り出しうるとしても、ついに私たち自身を造り出すことはできない。

言葉は意味を表わすために案じ出された。しかしそれは当初の目的から段々に墮落した。心の要求が言葉を創つくった。しかし今は物がそれを占有する。吃どもることなしには私たちは自分の心を語ることができない。恋人の耳にささやかれる言葉はいつでも流暢りゅうちやうであるためしがない。心から心に通うためには、なんという不完全な乗物に私たちは乗らねばならぬのだろう。

のみならず言葉は不従順な僕である。私たちはしばしば言葉のために裏切られる。私たちの発した言葉は私たちが針ほどの誤謬を犯すやいなや、すぐに刃を反して私たちに切っかかる。私たちは自分の言葉ゆえに人の前に高慢となり、卑屈となり、狡智となり、魯鈍となる。

かかる言葉に依頼して私はどうして私自身を誤りなくいい現わすことができよう。私はやむをえず言葉に潜む暗示により多くの頼みをかけなければならない。言葉は私を言い現わしてくれないとしても、その後ろにつつましやかに隠れているあの睿智の独り子なる暗示こそは、裏切ることなく私を求める者に伝えてくれるだろう。

暗示こそは人に与えられた子らのうち、最も優れた娘の一人だ。しかし彼女が慎み深く、穏やかで、かつ容易にその面紗を顔からかきのけないために、人はしばしばこの気高く美しい娘の存在を忘れようとする。ことに近代の科学はなんの容赦もなく、いかなる場合にも抵抗しない彼女を、幽閉の憂目にさえ遇わせようとした。抵抗しないという美德を逆用して人は彼女を無視しようとする。

人間がどうしてかほど優れた娘を生み出したかと私は驚くばかりだ。彼女は自分の美德を認めるものが現われ出るまで、それを汚ろうと企てたことがかつてない。汚ろうとした瞬間に美德が美德でなくなるといふ第一義的な真理を本能のごとく知っているのは彼女だ。また正しく彼女を取り扱うことのできないものが、かりそめにも彼女に近づけば、彼女はみるみるそのやさしい存